

環境史研究とフィールド調査の可能性について

－カルパチア盆地の河川景観の変遷から－

飯尾唯紀

Environmental History and Field Research :
Historical Riverscape of the Carpathian Basin

IIO Tadaki

1. これまでの研究テーマについて

ハンガリー近世史研究

大学院生時代から、今から 300 年から 400 年前のハンガリーとその周辺の歴史について研究を行ってきました。特に関心を持って取り組んだのは、地方社会において、日々の生活秩序がどのように維持されていたのかという問題です。そもそもヨーロッパ東部に関心を持つようになったきっかけは、大学生の時に衝撃を受けた「東欧革命」のニュースでした。東欧の様々な場所で次々と起こるニュース映像を見ながら、その背景を歴史的に遡って学びたいと考え、近代化以前の社会に関心を移していきました。

私が勉強を始めた頃、近世東欧の歴史は、貴族を中心に描かれることが一般的でした。国政分野でも地方社会でも、また政治、経済、文化の面でも、貴族は圧倒的な存在感を持つ存在として描かれていました。確かに、国王や都市、農民たちに比べて貴族が政治社会で大きな役割を果たしたことは、この地域の特徴のひとつといえると思います。貴族を抜きにしては、都市発展の独自性や宗教的風土の形成などについて語ることも困難です。ただし、その点を強調しすぎると、うまく説明できない現象もでてきます。例えば、人々の生活の中心となる村の教会を維持し、聖職者を選ぶとき、また村の中で諍いやトラブルを収めたりするときに、平民の団体が大きな役割を果たしていたこと。彼らが日々の生活圏を超えて情報交換を行い、広域的に外敵から生活圏を防衛し、治安を守るための組織を作っていたこと。また、たとえばドウ畑保有者の共同体のように、貴族と農民がともに農村共同体を作り、生産・販売のルールを作ったりしていたこと、等々の現象です。こうした状況を含めて近世の社会像を理解するために、農村社会の様々な共同体に着目し、教会の聖職者の役割に着目したりしながら、近世の地域社会においてどのような秩序維持の仕組みが作られたのかということを考えてきました。

最近では、18 世紀に時代を広げて研究を続けています。16・17 世紀のハンガリーは、オスマ

ン朝とハプスブルク複合国家がせめぎ合う場であったため、少し特殊な社会でした。中央統治が浸透しにくいフロンティア的な状況の下で、地域社会の中から自力で秩序維持の仕組みを作り上げる必要があったわけです。これに対して、オスマン朝がハンガリー中央部から撤退した後は、ハプスブルク家の王権の統治が地域社会に浸透しはじめます。18世紀は、これまで貴族・農民団体・聖職者という3者が作りあげていた日常生活維持の仕組みの中に、新しく国王がプレイヤーとして重みを持つようになる時代でした。そうした状況の下で、地域社会の秩序がどのように再編されていくのかについて今は考えています。

歴史遺産の拘束性

近世史研究から少し離れて、現在のハンガリー及びその周辺地域における歴史の遺産、拘束性についての検討も少しずつ進めてきました。ハンガリーは今から千年以上前に王国として建国されますが、その後、現在のEU加盟国に至るまでには、大きな歴史の断絶をいくつも経験しています。特に近代以降は、国の領域や政治体制、住民構成など基本的な枠組みが転換しました。歴史的に作られた制度や習慣、人間関係などが変化し、切り取られ、あるいは新しい要素が外から移植されていきました。このような歴史の遺産を読みとकिながら、現在のヨーロッパ東部地域の特色を理解できないかと考えています。

具体的には、宗教に焦点を定めて、近世に形作られた制度的・文化的遺産がどのように現在の政治・社会に影響を与えているかを考えています。例えば、現在のハンガリーでは、カトリックやプロテスタントの教会が教育や福祉の分野で見逃せない役割を果たしています。長期化している現政権の政策意向もあって、社会主義期以前に教会が運営していた公立学校の多くが教会運営に戻るといふ、「世俗化」とは逆の流れも見られます。また、長い歴史の中で形成された教会ネットワークは、近隣諸国との関係にも影を落としています。第一次世界大戦後、ハンガリーは多くの領土を周辺国に割譲しますが、それとともに教会組織や教会が蓄えた動産・不動産も新しい国境で分断されました。社会主義期には新生国家の国境内で教会ネットワークが再建されましたが、現在がかつて接収された教会財産の補償問題や国境を跨ぐ教会ネットワークの再構築が隣国関係にも影を落としています。これらの問題を検討しながら、ヨーロッパ東部の中での歴史的経験の差異による地域把握を試みたいと考えています。

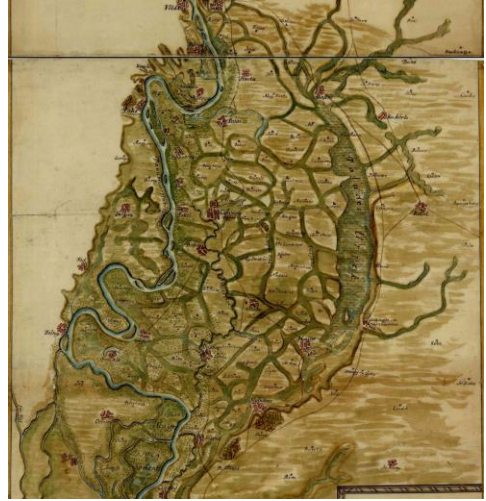
自然環境の歴史的变化

また最近、自然環境、特に河川と地域社会の関係の歴史的調査にも手を付け始めました。これまで古い時代の農村社会史を扱いながら、現在見えている景観を前提に考えがちとなってしまうことへの反省からです。現在でも、ドナウ川やティサ川といったハンガリーを流れる河川は春の雪解けとともに定期的に氾濫し、被害を生んでいます。近代に治水事業が行われる前は、河川流域の面積は現在と比べて遥かに大きく、また氾濫の季節も長く続いたと考えられます。こうした定期的に溢れ出す川との付き合い方や、近代化の過程での治水事業と地域社会の変化、その地域差について考えています。今回は、この最後の主題について、最近の現地調査の報告を交えながら簡単にお話したいと思います。

2. カルパチア盆地の河川景観の変遷

(1)18 世紀の治水事業と地域住民

カルパチア盆地の河川景観は、18 世紀後半から大きく変容します。ハンガリー平原を縦断して流れるドナウ川やティサ川では、マリア・テレジアやヨーゼフ 2 世の統治下で、大規模な治水事業が試みられるようになりました。この時期の治水事業が地域住民に与えた影響の一端をみるため、ここでは、ハンガリーの民俗学研究においてしばしば引用される一通の文書を取りあげ、住民の声を聞いてみます。次に挙げたのは、ハンガリー中南部、ドナウ川とシャルヴィーズ川に囲まれた水郷地帯シャルケズ地方の住民が、1778 年に貴族州に宛てた嘆願状です。嘆願状には、氾濫への対応を望む期待よりも、現状維持を望む住民の意向が示されています。



【地図 1】18 世紀のシャルケズ地方と蛇行する川

出典：Mikoviny Sámuel, Mappa Danubii cursum situmque, 1742

名誉ある貴族県の皆様、我らの恩寵ある殿方、保護人の旦那様方、

国王特使とペシュト県、トルナ県の代表の皆様が、ドナウ川とシャルヴィーズ川の調査のため、貧しき私どもの村々の村外れを調査されました。その時私どもは、[同行の] 技術者の方々が、ドナウ川のフォクとエールをすべて埋め立てて封鎖し、氾濫に備えてドナウ川沿いに堤を築いて土地へ水が侵入、流出する事を防ぐつもりであることを知りました。かかる計画が実施、達成されれば、たしかに何がしかの利益を期待できるでしょう。しかし、利益は労力の 100 分の 1 にも満たないと存じます。さらに率直に言えば、[計画は] 私どもに損害をもたらすことは明らかで、生き残りの最後の抛り所を奪うものだと大変恐れております。

私どもは幼少時よりここに住み、大小の氾濫を経験しております。土地の扱いのコツも良く知っており、水を理解しております。小さな氾濫や普通の氾濫から利益を得ているのです。乾燥時には豊富な刈草や牛の放牧のために利用し、魚が捕れば食用だけでなく、[売りさばいて] 衣服を得て、租税や宿営税を支払うこともできるのです。この地を耕地にしたところで、大した利益を期待できないでしょう。現状を見ていただければ、[氾濫から] かくも利益を得る仕組みは減多にない和理解いただけるでしょう。[計画は] 牛や豚を育て放牧する機会を私どもから奪うことになります。私どもは、土地の性質を最もよく知っています。甚大な氾濫に際し、土手や堤防、水止めや堰によってドナウ川の流出が溢れるのを防ぐことができるとは到底思われません。普段どおり水が溢れることは、私どもに損害で

なく利益をもたらすので、対策は必要ありません。他方、甚大な氾濫に備えた工事は、結局のところ私たちの土地に〔氾濫後に〕引かない水を残し、泥沼を作り、私どもと牛たちの死をもたらすことでしょう。急には元に戻せず、私どもにとっては生命の危険を、滅びを引き起こします。

それゆえ、私どもは畏み懇願し、名誉ある貴族県の理解ある旦那様が解決策を講じられるよう陳情いたします。私どもが将来の苦しみから開放され、滅びてしまわないよう、偉大な神が私どもの懇願をお聞き届けになることを。名誉ある貴族県の高貴なる心を、私どもの利益に振り向けさせることを。私どもが平和に生き延びられることを。

名誉ある貴族県を畏れ敬う貧しい子等、ニューク村とピリシュ村とデチ村の貧しき者ども¹

ここに長く訳出した嘆願状から、次の点を確認しておきたいと思います。第一に、氾濫原が住民生活の「最後の抛り所」ととらえられている点です。当時の領主・農民関係の中で、農民の租税負担額の基準となっていたのは耕地の持ち分でした。耕地の外にある氾濫原は、家畜の放牧や漁業が行われる場として、周辺住民の生存維持に欠かせない役割を果たしていた様子がわかります。第二に、地域住民が貴族や国王の特使、技術者よりも河川や氾濫を知悉しているとの自負を持っていることにも注目したいと思います。住民は川の氾濫を利用する術を心得ており、観察・実験に基づき社会改造を試みる啓蒙期の余所者の識者への不信感が吐露されています。第三に、治水事業として、氾濫に備えた堤防建設などの工事と並んで、「フォク」や「エール」の埋め立てが挙げられていることも目を引きます。この「フォク」や「エール」こそ、住民の氾濫原利用のひとつの鍵となっていたものと考えられています。

民俗学者アンドラーシュファルヴィらの研究によれば、「フォク」や「エール」は川にしつらえられた水路で、増水時にはこの水路に水を逃がすことで川からの際限ない浸水をコントロールしていたと考えられています。さらにこの水路は、洪水対策となっただけでなく、漁場としても利用され、村まで引き込まれて住民の日常用水としての役割も果たしていたといえます。上の住民の嘆願は、こうした住民の氾濫原活用の実態を無視した国王や貴族県主導の土地改造計画への抵抗のあらわれといえそうです。

このような地域住民の陳情にもかかわらず、その後、この地域で治水事業は実施され、工事には地域住民が動員されました。国王や貴族県が実施に踏み切った背景として、アンドラーシュファルヴィらは次の要因を指摘しています。第一に、氾濫原を耕地に造成して輸出向け穀物生産を強化しようとする国王と領主の意向が強く働いたこと。第二に、ドナウ川を穀物輸送路として利用するため、曲がりくねった河川を直線化し航行を効率化する狙いがあったこと。その際には、川岸から川を遡って船舶を馬で牽引できる道を作るため、水路も埋め立てる必要がありました。さらに、アンドラーシュファルヴィは言及していませんが、第三点目として、地域住民の間で氾濫や河川利用を巡る利害の不一致があり、陳情を行った村々の意向が広範な反対運動につながられなかったという事情も考えるべきだと思います。

18世紀はハンガリー西部を中心に領主直営地が拡大し、西欧向けの穀物輸出がブームを迎えた時期として知られています。その背後で、地域住民の河川利用は制限され、川の「囲い込み」

ともいべき治水事業は自然景観を大きく変えつつ、地域の社会関係にも大きな影響を与えたと考えられます。また、川との関わりや治水事業の実態は、同じ河川であっても森林や湖沼など周辺環境との関係でも大きく異なっていたはずで、川との関係を軸とした視点から、カルパチア盆地の近代化における地域社会の変容について新しい知見を得ることができるのではないかと考えています。

(2) フィールド調査の可能性

失われた氾濫原の社会については、上でみたように、治水事業前後に作成された地図や行政当局、領主所領文書の断片的記述、同時代の旅行者の観察などから復元するのが歴史学のオーソドックスな手法だと思います。ところが、農村部の一部では、現在なお氾濫原が痕跡をとどめ、利用されています。ここに、フィールド調査によって別のアプローチする可能性があると考えています。調査はまだ手探り状態で進めていますが、2017年9月に行った現地調査で確認した氾濫原の痕跡や利用の様子をご報告します。

調査を試みたのは、ハンガリー北東部のサボルチ・サトマール・ベレグ県東端で、ウクライナやスロバキア、ルーマニアの国境に近い場所です。このあたりは、サトマール平野の一部をなしており、数キロおきに点在する村々の間をティサ川と支流のトゥール川が入り組んで流れています。治水事業と氾濫原の耕地化が十分に行われておらず、地図を見ると、古い川や支流、馬蹄状の池の姿をあちこちに確認できます。蛇行していた川をバイパスで直線化したあとに旧河川が耕地化されなかったため、池として残った状態です。

はじめに確認したのは、川から人工的に作られた水路（フォク、エール）の痕跡です。

【写真1】は、キシャル村の横を流れるティサ川の様子です。湾曲して流れる外側に林と堤があります。川沿いで農業を営む方の話では、川の湾曲部（写真右側）から村の中心にかけては車が通れるほどの幅の水路が引かれていたとのことでした。水路は埋め立てられ現在は車が通ることのできる道になっていますが、かつては「大きなフォク」通りと呼ばれていたそうです。古い地図とつきあわせて確認する必要がありますが、道が川の堤で行き止まりになっているのはその名残ではないかと考えられます。

別の村では、川の本流から数キロ離れたところまで引かれた水路跡が残っており、増水時には今なお村の住民が浸水を利用している



【写真1】ティサ川湾曲部（右手奥にキシャル村が位置する）



【写真2】フェレジュド村入り口の水路（9月撮影時には、水の流入は確認できなかった）

という話も聞きました。【写真2】のフュレジュド村は世帯数 150 ほどの小さな村ですが、かつて漁師を生業としていた方がおり、引退後も増水時には水路に仕掛けを張って趣味で漁をしているとのことでした。季節や漁をする川、水路の大きさに応じて3種類の仕掛けを使い分けていました。ただし、現在はEUの規制が漁師の網の種類まで細かく及ぶようになり、当地域では小規模な漁師は生業として成り立ちにくくなっているようです。

19世紀のフュレジュド村の地図をみると、かつては村の外周に水路が張り巡らされていた様子が確認できます。「麻洗いの水路」といった名称もみられ、水路が漁業以外にも布染めなど村人の日常生活に利用されていたことがうかがわれます。領主所領の文書のなかでも、河川や所領内の池での漁業権について農民が漁を行うことができる時期や領主への支払いについての記載が散見します。しかし、このような形で村まで引き入れられた水路は、領主の管轄外にあって、共同体が管理していたのではないかと考えています。

水路の痕跡と並んで確認できたこととして、氾濫原の果樹園や養蜂業への活用の具体的な様子があります。【写真3】は、さきほどのキシヤル村の川の湾曲の外側の林を撮影したものです。このあたりは春から夏の増水時には定期的に冠水した状態が続きます。雑木林に見えますが、果樹林としてある程度人が手を加えて維持されています。



【写真3】キシヤル村近くの氾濫原の林

ここでは、林檎とプラム、胡桃の木が「育てられ」ていました。カギ括弧つきで「育てられ」としたのは、人が播種や施肥を行っているわけではないためです。住民の話では、人が手を入れるのは、成長の悪い幼木を間引きし、枝を落とす作業ぐらいのようです。鳥が果実をついばみ、落とした種が育つのに任せているとのことで、乱雑に植わっているように見えます。冠水時に川が運ぶ肥料や攪拌によって土が豊かになり、耕地の果樹園よりも樹木の成長が早く、太く高い樹木が育つとも聞きました。実際に、川の周辺には遠くからも確認できる背丈の高い樹木が点在していました。



【写真4】中央には氾濫原の胡桃の太木（木の下に立つ人と比べると高さが際立つ）

さらに、調査の過程で、氾濫原に暮らす人々の死生観を現すような事物にも出会いました。この地域一帯は、近世には旧ハン



【写真5】サトマールチェック村の舟形墓標

ガリー王国とトランシルヴァニア侯国の境界地帯に位置し、宗教的にはヨーロッパ東部では珍しく改革派(カルヴァン派)が村落住民の間で強固な地盤を築いた地域として知られています。ところが、この地域には、他のキリスト教の墓地とは一風変わった墓標がみられる村があります。【写真5】はサトマールチェケ村の墓地を撮影したのですが、ここでは木製の舟形墓標が直立して並んでいます。この墓標の解釈は諸説あるようですが、川に密着した人の生涯のイメージがうかがわれます。墓標には、いずれも死者の名前とともに"BFRA" (ハンガリー語で「祝福された復活の日を祈って」の略) と彫り込まれていました。キリスト教の終末思想を下敷きとして、復活の時に死者が船に乗って帰ってくるができるように、との意味が込められていると考えられるかもしれません。話を聞いた村一軒の墓標作り職人の家では、2017年の宗教改革500周年を記念し、教会に奉納する舟形墓標を作っている最中でした。

調査はまだ手を付け始めたばかりですが、これまで親しんできた文書調査からは得られなかった事実の連関がみえてくることもあり、発想の刺激も得られています。文書調査とフィールド調査の両面から、地域の特徴の歴史的把握につなげていく試みには、大きな可能性があると考えています。

3. 研究の授業への活用について

現在担当している授業のうち、「東ヨーロッパ地域研究」の内容は、歴史研究と地域研究の両面からのアプローチで構成しています。この授業では、東欧や中欧と呼ばれる地域の成立と変容、その地域特性などについて、歴史史料だけでなく、地誌学的情報、国勢調査等の統計資料を用い、現在の政治情勢のニュースの背景分析なども交えながら、できるだけ多面的に把握できるよう工夫をしています。

今回の報告との関連では、授業1回分を使って、フィールド調査に際して撮影したインタビューや写真、現地で入手した墓標の舟形模型などを手がかりとして示し、まずヨーロッパと日本の河川と人の関わりの違いを考えさせています。そのうえで、ヨーロッパ内の諸地域における自然環境と人の関わりの差異や背景について、参加者がそれぞれ興味を持っている国について調査し、授業終了後のコメントペーパーと次回授業時の質疑応答により理解を深める試みをしています。

[付記] 本稿は、文化社会学部第3回研究交流会(2018年10月24日 14号館14-405教室)で行った報告の記録である。

註

¹ Andrásfalvy Bertalan, *A Sárköz és a környező Duna-menti területek ősi ártéri gazdálkodása és vízhasználati a szabályozás előtt*, Budapest, 1973, p.54より引用。引用した文書の原典は散逸のため現在は所在が確認できない状態という。なお、改行および[]内は筆者による補足である。

引用文献、主要参考文献

Andrásfalvy Bertalan, *A Sárköz és a környező Duna-menti területek ősi ártéri gazdálkodása és vízhasználatai a szabályozás előtt*, Budapest, 1973.

Andrásfalvy Bertalan, A vízhasználat és árvízvédelem hagyományai Magyarországon, *Magyar Tudomány* 45-6(2000), pp.709-719.

Bél Mátyás, *Magyarország népének élete 1730 táján*, Budapest, 1984.

Ihrig Dénes (ed.), *A magyar vízszabályozás története*, Budapest, 1973.

Mikoviny Sámuel, *Mappa Danubii cursum situmque*, 1742.

(ハンガリー国立文書館 Archiv Atlas: http://mnl.gov.hu/mnl/ol/mikoviny_samuel)

Tenk Béla, *A vízszabályozások Tolna vármegyében a XVIII. században*, Pecs, 1936.